

校 友 会 報

第 1 5 号

昭和44年7月20日

日本大学工学部校友会

福島県郡山市田村町徳定

電話 郡山 2 - 1563

郵便番号 979 - 63

発行人 半 沢 忠

編集人 平 手 仁



校友の皆さんへ

日本大学工学部長 野 引 勇

昨年の紛争以来、校友のみなさんには大変な御迷惑をかけ、又種々の面で大変御世話になりました。しかし、御承知の様に全国的に広まった学園紛争の波は、全体としてみる限り今なお決して衰えていないのみか、見方によっては再度高まりをみつつあるとも云えましょう。



此の様な環境の中で、わが工学部をはじめとして、日大全体も「授業をする」という面のみでの正常化は漸く軌道に乗ってまいりました。でも「授業」さえ出来ない姿がやっと「授業」が出来るようになったというだけでは、問題が解決したことにはなりません。民主化された新しいそしてあらゆる批判に耐え得る大学として、此処で日本大学は大きく脱皮成長しなければならない。これが現在の最大の課題であります。その様に少なくとも私は確信しております。

紛争一年にして、漸く授業をやっているという姿では、新寄附行為にもとづく新評議員の選出も、いわんや新理事による大学の「責任体制」の確立など早急には到底出来ない相談であります。大学改革という世紀の仕事と取組み、大きく脱皮成長するために何よりも大切なのは、現在に於ては、此の大学の主体性の確立（責任体制の確立）であり、今ほどこれが痛切に要求される時はありますまい。国内外の環境が良くない上に大学の「責任ある体制」の確立が遅れていること、いや遅れざるを得ない大学の弱体質、此の辺にどうか校友のみなさん、思いをいたしていただき、今後何分の御支援をお願いしたい。

今工学部としては、四十五年より大学院を設けること、地方に存在しながらも地方大学ではない実質と此の時期を機に世間にも認識してもらうこと、後輩の指導のために校友諸兄の力を集中した新しい施策を如何に講ずるかということ、荒池の土地利用その他、これまで手の届かなかった面にも積極的に大きく手を打ってゆくこと、地域社会との結びつきについても紛争の経験等を反省して深い思慮のある方途を講じていくこと、等々考えれば考えるほど新しい大学づくりの課題はふくらんでゆきます。

私達は、学部をあげてこうした課題の解決のために取り組んでいます。

校友のみなさん、どうかあらゆる機会に御声援ください。そして、みなさんも益々御発展くださる様にと御祈り致します。筆者・日本大学工学部一般科教授)

御 挨 拶

会 長 武 田 仁 幸

昭和44年度総会に於いて会長に推薦され、責任の重大さに非力の私は当惑しておる処であります。しかし精一杯の努力を以て校友諸兄の御期待に背かぬ心掛けをいたしたい所存でありますから宜しく御指導のほどお願い致します。



かえりみますと昨年は日本大学史上初の学園紛争があり、我が工学部も一部の学生によって校舎の占拠等種々問題が起りましたが、現在は新しい日本大学寄附行為のもと、平常に授業が行なわれております。これもみな学部、校友諸兄の御指導と御鞭撻、学生諸君の協力の賜ものであり深く感謝致します。

校友会も早いもので10周年を昨年迎えましたが、紛争の最中であり記念行事も出来なく過ぎ去り、残念でなりません。本年は平年事業の外に次の様な目標で進みたいと思いますので御協力下さいます様にお願い致します。

1. あかしや奨学生の増員

前年までは5名でありましたが、学生諸君からの強い希望があり5名を増員し、育英事業の一環として学生に還元したいものと考えます。

2. 支部結成

校友会も正会員が7千名、準会員4千にもなりますと、全員が一同に集まる事も現実としては不可能であると思います。それで地方単位(10ヶ所位)として校友相互の親睦、後輩の育成指導、母校発展を望み支部を結成したく考えております。この件に付きまして何か別に校友諸兄のお考えを聞かせて頂きましたら幸々と思います。

全国各地に御活躍の諸兄、昨年は世界生産第2位となり、工業国日本の名を高からしめました。国家情勢も日々に進歩し「21世紀は日本の世紀」と米国のハドソン研究所長カーン博士が言っております。この言葉をかりれば日本は21世紀に於いて工業国日本の名をほしいままにすることでしょう。しかし又反面に於いて「繁栄はしているが尊敬されていない」とも言っている。この言葉は何を意味しておりますか、工業万能の日本国民であれば繁栄し、尊敬される本当の21世紀にしたいものです。

このためには技術の向上、設備の近代化、量産体制の確立と種々叫ばれますが、何においても人事政策が

あやまっておれば企業が確立する事は出来ない。

各種の企業は優秀なる人才を求めてやまないと思います。校友諸兄も技術革新を軸とした経済成長に勇猛邁進下さいます様お願い致します。

最後に校友会、母校の発展と諸兄の御健康をお祈り致します。

(土木科第3回卒・自営・東和工業株式会社)

大学視察の旅

教授 本 間 啓

(工学部広報No.4より転載)

工業化学科の宇野原教授と一緒に海外出張をしてきた。主として欧米各国の大学視察が目的であったが、パリのソルボンヌ大学などは、丁度紛争中で立入ることが出来なかった。

オックスフォード大学は、どちらかといえば、法文系が最も充実しているから、理工系がそれより幾分見劣りするのには止むを得ぬことかも知れない。この理工系学部は、エンジニアリング・サイエンス・デパートメントと呼ばれて、低学年では徹底的な基礎科学の教育が行なわれるカリキュラムが組まれていた。

応用学としての工学は主として基礎学の完成をまって、3、4年生で習得することになっている。また2年生までは全寮制を敷き、学校のキャンパス内に散在するせいぜい20~30人という小単位の寮で生活する。これらの寮には、それぞれ2~3人の指導教官がいて、いわゆる人間対人間の教育が実施されているから、大学紛争などあり得ないということだった。羨ましい限りである。

また、オックスフォード大学に限らず、ヨーロッパの伝統ある大学の、素晴らしく広大なキャンパスは、最近ではテレビなどで盛んに紹介されるので、ご存知のことと思うが、その広大な敷地が隅々まで手入れされていて、さながら学校庭園という感じがする。この環境が、学生の向学心を燃え立たせ、研究の成果に効果的な影響を与えているのだと思ったことだった。アメリカ合衆国に入ると、その国柄もあって、大学の規模も又一段と大きくなる。マサチューセッツ工科大学、コロンビア大学、カリフォルニア州立大学などを視察したが、それらは説明し難いほど広大な敷地をもっている。

マサチューセッツ工科大学は、研究を主とした大学院大学のような様相を呈している。他の大学でもそうだが、アメリカ合衆国では講座制をとるよりも、むしろ共同研究者による共通研究室といった形で研究が進められている。

コロンビア大学も、どちらかというとな文系が支配的な大学で、工科系は優遇されていないように見受けられた。電気系学科では電子工学関係が殊に充実していたようである。

カリフォルニア州立大学は、ロスアンゼルスとバークレーの2箇所にキャンパスがあるアメリカでも指折りのマンモス大学である。しかし私の訪れたバークレーの校舎だけでも百を超える校舎が整然と建ち並び電気系学科の教員数も教授25名、助教授20名、講師15名、それに助手20名を配して、多数の学生教育に對應する姿勢がうかがえた。

アメリカでは、世界各国の優秀な研究を正しく評価し、その業績を素早く受容する寛大さがあるように思われた。そして又、そのことが、世界最大のアメリカ合衆国を築く活力になっているのだと感じたことだった。

3ヶ月の出張は、明け暮れ大学視察に終始したわけではない。西洋の食事が体に合わず、日本料理を食べられる店を探して歩いた思い出などもあるにはある。

(筆者 日本大学工学部電気工学科教授)



郡山周辺の事など

村の鍛冶屋 アポロ11号が月面に着陸したと云うのに、平凡な話で申し訳ないが、大学がこの地に根を下ろして約23年にもなると、地域の人達との色々な交渉が生まれる。

それは工学的関連のあるものだが、先づ鍛冶屋について話そう、現在は、もうあまり見かけなくなったが、7～8年前にすでに企業の体質改善を行ったからだ。つまり農業機構の進歩で、主として農具の修理や製作だけでは喰べていかれないので、その頃よく私の実験室に材料強度試験の依頼に来た村の鍛冶屋さんは特殊鋼でピッケルやアイゼン等のスポーツ用品を作り始めた。登山人口が増えて来た現在では、結構採算に合うらしい。

こうして時代の流れにうまくのる事の出来る人もいるが、そのまま消えてしまう人もいる様だ。又郡山のベツトタウンとなりつつある三春町は、歴史の古い町で、「でこ屋敷と呼ばれる民芸品の生産地区でもあり、好事家間では全国的に名を知られている、此の町にふとした事から鉄銃の表面処理（パーカーライジング）の相談を受けた事で鉄砲鍛冶屋がある事を知った。町田収太さんと云って、三春藩の鍛冶屋として世襲して、今日に至っているが現在は製作はしていない、1～2度作業場を見せて頂いたが、町田銃砲工場の看板がさがっており、銃の専門工場である。

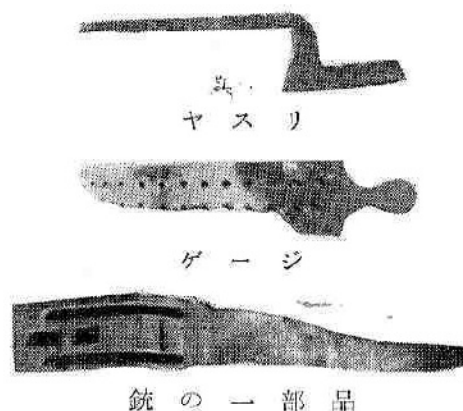
まず見て驚いた事は火縄銃の製造工程とそう変わらない姿で工具が残っているからだ。明治初期の欧米から入った機械技術以前の、我国独特の機械工学の技術が見られるのは珍しいとされている。ヤスリ、タッブなどの工具も全部自作したもので、現在から較べるとずい分おもしろい形をしている。

写真はヤスリの一部である、銃の製作上での重要な作業は穿孔であるが先づソリッドの銃身をパイプの中に固定し柄の長いドリルを手動で回す。同時に軸方向にも押しこむわけだが、真直ぐに正確にあげ終るのには約一週間もかかったと云う事だ。

鉋あなの仕上げにはリーマーもあって加工原理は現在とまったく同じである。たゞ工場を閉じて久しいので作業所は荒れるにまかせている。土間の中にゲージや、たがねが埋もれてもいる様だ。

こうした地方に細々と残っているものは技術の歴史上からもきわめて貴重な資料であると思う。地方にある大学の地域社会に対する一つの義務として、三春町の鉄砲鍛冶工場の工具類は、将来保存したいと思う。

菅野 宗和



石川地方の貝化石 安積永盛から水郡線で南下すると塙(はなわ)と云う町がある。この附近の山には多量の化石が採掘されるが、特に貝化石は粉にすると鶏の飼料となるため製粉工場が集中している。成分は酸化カルシウム、無水珪酸、アルミナ等が含まれるが、製粉工程中に発生する遊離珪酸が人体に有害なので、労働衛生上の問題となる。前に福島県の労務基準局の技官と調査指導をした事があった。

工程の概要は、天日乾燥した化石をハンマクラッシュヤーで粗粉碎し、これを回転乾燥炉を通し又微粉碎しふるいで粒をそろいて袋積をすると云う簡単なものだ。セパレートと袋積の防塵処理が全然ない状態で持参した粉塵計では粉塵許容度をはるかに上回る値を示し工場大気汚染の典型的なケースであった。

近代的な工場ではバッチャースケール等の立派な設備で無人化出来るが、10人内外の小企業では資金的に無理である。がしかし現実的には3米先が見えない様な環境を安価に改善する方法を開発せねばならない。私の研究室では以上の見地から、関連した具体的な実験を二、三試みているが、生産に派生して生ずる工場汚染の問題は、境界科学の一つであり、諸学問の谷間にあるので色々な意味で大変な事ではある。

しかし工学の体系からは日のあたらぬ仕事ではあるが地域の人達の健康を守るためには、やはり地方にある大学の一つの義務ではないかと思っている。

(筆者 日本大学工学部専任講師 機械科2回卒業)

校友会臨時総会開催のお知らせ

別紙の通り正式なる通知により御承知のことと存じますが、会報にも重ねてお知らせしますので校友会多数の御出席をおすすめいたします。

記

1. と き 昭和44年8月24日(日)午後1時
2. ところ 日本大学工学部校友会館
3. 議題 学部のクラブ援助について

郡山を想う時

西 尾 功

今年の3月、転勤は仙台に成りそうだと聞いただけで頭の中では郡山に近くなり、きっとその間にいつか、大学の方にも行けると思うと、丁度小学生の修学旅行のように胸躍らせていた。そして4月、東京から予定通り仙台転勤になった。



早速、大学の師橋先生の所へ連絡したところ、丁度公務員志望の学生の為に、現在公務員に成っている人達と話し合う機会を持つことになったから、君も一枚加わって、体験談を何か話をしてくれと云うことに成った。我輩は人前で話をするなどとは僭越で、しかも卒業して5年目、体験と云う体験などしていないが、この機会に郡山へ行きたいばかりに、それではと云うことになってしまった。

4、5年前とはすっかり変ってしまった大学のキャンパスを歩きながら、新設した立派な鉄筋コンクリートの図書館をはじめ講堂、多くの実験棟、学園内がすっかり舗装され、長靴で通学する必要も無くなった校内、又一方では、学園紛争の名残りが、本館の改修工事とそれらを見るにつけ、嬉しいような、淋しいような気持ちを味わいながら、懐しい想いにふけていた。

丁度その折、校友会事務局へ挨拶に行った関係もあったのか、[※]私の体験談は大して言ひもしなかったから、一つ原稿にでも書かせて、罪の償いでもさせよう[※]となったのだろう、後日電話があって何か書いてくれと云うことに成ってしまった。そこでこうして、筆を取ることにした。

4月1日付で仙台へ転勤に成るその3日前の29日に結婚し、その式の折病気で療養中のところをわざわざ出席していただいた、木下茂徳先生始め、先輩の後藤氏、同級の金村、小槻、梶、四国に居る西村諸氏の協力で無事式を終った時、何にもまして、これほど同窓同級の友情、支援を有難く思ったことはなかった。

新婚旅行は、転勤と経済的関係もあって、伊勢志摩方面に決めた。伊勢神宮を参拝の後、鳥羽に向った。鳥羽を観光中、真珠で有名な真珠王御木本幸吉の生涯の縮図が納められている会館に足を向けた。館内を閲覧しているとき、そこに幸吉の生前の作品である、数千の真珠とダイヤを用い、当時米国で行われた万博に

出品する為に作った[※]自由の鐘[※]と云う鐘楼が置いてあった。私は精魂こめて作られた美しい芸術を眺めながら、彼は何を想い、何を願いながら、この自由の鐘を創り上げたのだろうか。美しい一個一個の真珠の輝きに見とれている時、[※]これは高いおまっしゃろ[※]うな[※]あと言う声で我に帰った、今の今迄美しいものの中に没頭していた想いが一遍に消しとんでしまった。

ふとその時つくづく人それぞれ美しいものに対して受取り方が違うものだ[※]と痛感した。隣りにいた人達は言葉つきから察するに関西の人であった。なるほど経済的に鋭い感覚を持っている。物を判断する時に、真珠が何個あるから、値段がいくら、ダイヤが何個でいくら合わせていくらいくら、[※]高いおまっしゃろ[※]うな[※]あ[※]と自分に言い聞かせ、一旦自分の財布をしめそれから、じっくりと見ていた。ふとこれを関東の人達ならばどう判断するだろうかと思った。察するに[※]これは美しい、買えるものなら、江戸ッ子だ、夜越の金は持たない、有り金全部出して、買っちゃおう[※]と実際は買えなくとも心の中では思うだろう。では東北の人達だったらどう思うだろうか。まず[※]やあ、きれいだばい[※]と一言だけ云うであろう。これは関西、関東と根本的に異っている。なぜなら、前二者は自分の所有物にする場合の自己中心的見方で物を見て、純粋に見ようとしていない。東北の人は、自分と云うものを中心に考えず、良い物・美しい物は美しいと感じ、一人占めしようと云うような、自我を出さない。これが東北の純粋さ、素直さとしての良き伝統の基を成しているように思われる。

快晴に恵まれ、伊勢、鳥羽の風景はすばらしかった。しかし自分の心はこれから行こうとしている、仙台へ向いていた。それは、これから始まる他台での新しい生活への憧れか、それとも、仙台局での仕事への期待か、いやそれとは違った何かがあるような気がした、それは、4年間暮したことのある、東北郡山への郷愁ではなかっただろうか。

旅をして、美しい山河や、豊かな田園にあうとき、ここに住み、ここをふるさととする人々を羨ましく思うことがある。しかし、時がたつにつれて、その印象は、うすれて、ついには忘れてしまうのである。

旅ゆく人は、あの磐梯山の、雄大な峰を、猪苗代湖の澄みきった水を、又ある人は、五色沼・松原湖の美しさを心にとどめても、途中の郡山は旅ゆく人々の足をとどめたり、目をそばたてるほどの美しさも、豊かさもない。いわば、平凡な地方工業都市にすぎない。

芭蕉の「旅に病んで夢は荒野をかけめぐる」その夢は、その旅をした土地と青少年時代を過した、ふるさとに及んでいと想像される。

私達は、さまざまな理由で郡山を出て旅に暮している。そして、東京のような、人の海とでもいわれる所ともなれば、同級生が互に相会することは極めて稀であるのみならず、時に雑踏の中ですれちがったり、同じ電車に乗り合せても、気もつかずに別れ別れになってしまうことさえある。それにもかゝらず郡山のことを常に懐しく意識しているのは、なぜゆえだろうか。生れて始めて親元を遠く離れての生活、人生に於て一番大切な人間の成長期に同じ世代の仲間と共に磐梯山のふもとで4年間暮したと云うことは、それほど

深い因縁であると云うほかはない。

「ふるさとの山はありがたきかな」と啄木はうたっている。「磐梯山はありがたきかな」そのありがたきと云うものであろうか。この郡山は、私には死ぬまで忘れる事のできない懐しい第二のふるさとである。

たそがれ時、大学のキャンパスを出る時、今も変らぬカッコー鳥の声を聞きながら、4年間の東京の生活の間に忘れていたものを取り戻すかのように、心の中で徐々に浄化作用が始まっていることにふと気づいた最後に学園の一層の発展と校友諸兄の一層の御活躍と御健康を祈ります。

(筆者は第13回建築科卒業・仙台防衛施設局建設部建築課建築第四係長)

日本大学工学部校友会11年のあゆみ

昭和33年

◎ 日本大学第二工学部校友会発足

卒業生の数も千名を越え、校友の親睦と母校の発展に寄与するという目的で、校友会を作つてはという声があり、土木科卒業生の渡辺幸夫氏外数名の方が発起人となって、発足総会の準備にかかり、昭和33年5月22日郡山商工会議所にて総会が開かれ、北は北海道、南は九州より校友多数の出席を得て盛大に行われた。当面の事業としては、校友会館の建設をすることに決定された。

(会長渡辺幸夫氏土木1回卒業)

して「学業・人物ともに優秀であつて、経済的理由のあるもので、母校発展のために現在はあるもとより将来においても役に立つ働きの出来る見込みのある者」という点に主眼をおいて設けられた。

校友会事業の主なもの

1. あかしや育英奨学制度の設立
2. 学生下宿幹旋
3. アルバイト幹旋 } (現在は学部で実施している)
4. 就職幹旋 }

(会長 関根昭一氏電気2回卒)

昭和34年

◎ 校友会館の落成

校友並びに学生の憩いの場となる校友会館が、学部当局の絶大なる援助により、学内敷地の南端の小高い所に総建坪59坪をもって落成したので、昭和34年5月第2回の校友会総会を落成式を兼ねて開催し、今後の校友の結びつきをより一層強いものとする事を誓い合う。

そして事務局を会館内に設置し、専従職員をおいて会員相互の連絡、その他の事務を行うようになる。

(会長関根昭一氏電気2回卒)

昭和35年

◎ 校友会報創刊号が発刊

校友会の運営が軌道にのってきたので、タブロイド型4頁の会報を発行し、校友の消息、学内の様子、校友だより、校友会の事業報告などの内容をおり込んで校友各位に配布する。

◎ 新事業「あかしや育英会」の設置

会則の主旨に基づき、奨学資金制度が学生の要望もあり設立され、第二工学部の学生を対象と

昭和36年

◎ 新入生に対する下宿幹旋の開始

昭和35年の事業方針に従い、学部学生課から事務を引継ぎ全面的に校友会で引き受けることになり、事務局がてんやわんやしながらも、下宿主を訪問などしながら、650件以上をなんとか幹旋することができた。

その後も新しい下宿主の開拓・下宿主と学生側と学部側の三者協議会の開催、下宿主を対象とした栄養講習会などを校友会主催で開き、下宿学生の生活改善向上につとめた。

◎ 学校学術講演会の後援を行う。

学部主催、校友会後援で学内学術講演を行なつたところ、長年こういった講演がなかっただけに36という講演数にのぼり、学内関係者から好評を得た。今後は年1回開催するようにし、対象も学内関係ばかりでなく、卒業生にも参加してもらうようにすることになった。

◎ 第4回総会 校友会館にて開催

(会長関根昭一氏 電気2回卒)

昭和37年

◎ 下宿幹旋軌道にのる。

下宿幹旋も2年目に入り、下宿屋の開拓、下宿台帳の作成、料理講習会の開催などを行なうようになり、事務処理もスムーズに進めることができ、幹旋事務が軌道に乗ったというべきであろう。

◎ 学園の造成着々と進む

昭和31年の新校舎建設以来、学部百年の計に基づき着々と建設が進み、昭和35年に実験校舎、昭和37年には講義室校舎、管理棟、実験室6棟、俊英寮など続々と完工し、今までの校舎はどこへやらで、まったく新しく生まれ変わってしまった。

◎ 第5回総会 校友会館にて開催

(会長 関根昭一氏 電気2回卒)

昭和38年

◎ 第二工学部校友会東京地区懇親会開催

昭和28年3月第1回の卒業生が社会に巣立ってから、校友の数も2,500名を数えるようになり、日本全国各地において活躍されている。かねて要望のあった地区別の集りをテストケースとして東京地区に持つことになり、東京のプリンスホテルで開催したところ多数の来賓、校友の出席があり、頗る盛会であった。会は意義あるものであったので、今後も隔年に開くことを決議して散会した。

◎ 校友会会則改正により終身会費制生まれる。

昭和38年度校友会総会は、校友会館で開催されたが、従来会の運営費は入会金と経年会費とでまかなわれていたのを会員増と事務手続き上から検討した結果経年会費を廃止し、終身会費制をとることに決定した。また学部の校舎建築により、校友会館が不便を感じるようになったので、移転することも決定される。

(会長 関根昭一氏 電気2回卒)

昭和39年

◎ 校友の学生への講演・懇談会開催

在校生のために第1回の講演・懇談会を、1回から3回まで各科1名ずつ計5名の先輩校友を招待して開く。講演は各科毎に分れて掛図やスライド・映画などをを用いて懇切に説明され、学生も学部の講義とは別の興味をもって熱心に聴講した。

講演終了後は懇談会に入り、現実社会で活躍している先輩の体験談や助言などがあり、なごやかな雰囲気の中に終了した。今後もこのような会が開催されることを望む声が学生に多かったので、校友会としては毎年開催するように努力することを決定する。

◎ 校友会館の現在地への移転完了

学部敷地の南端にあった校友会館は、学部の校舎建築が実現するにつれて、距離が遠くなったのでかねてから現在地に移転工事を進めていたが、

7月に竣工し移転した。移転とともに内部を多少改造し、一階を学生ホールとして解放する。以後毎日多数の学生が出入し有意義に利用されている。

◎ 第6回総会郡山駅前コーケンビルにて開催

(会長 渡辺幸夫氏土木1回卒)

昭和40年

◎ 日大磐梯高原寮、大講堂、本館の建築落成

待望されていた日大磐梯高原寮が、会津猪苗代町の磐梯国際ロッジ近くに建設され、学生、校友などに解放されるようになった。今後心身の練磨に、憩の場に、大いに利用されるものと期待している。

一方学部内ではかねての念願であった大講堂兼体育館、本館(図書館)の建設が進み、学部も全国でも類をみない規模のものとなり、内外共に充実した学園となる。

◎ 第2回校友の学生への講演・懇談会開催

39年に続き先輩校友9名の方を招待し、前年と同じく講演・懇談会がもたれた。特に質疑応答が活発に行われ、学生にとっては大変有意義であり、校友会としては欠くことの出来ない事業となる。以後毎年開催することに決定する。

◎ 第7回総会 郡山商工会館にて開催

(会長 渡辺幸夫氏土木1回卒)

昭和41年

◎ 校友会の名称が変わる

学部名改称とともに校友会名も日本大学工学部校友会となる。我が母校は昭和22年専門部工科として郡山に発足したが、学制改革により第二工学部として20年を経過した。その間卒業された先輩方が、在校中から学部名変更について要望を続けていた。しかしそれが容易に実現せず「名称は何であっても、実力があればよいではないか」「レツテルを張替えても中味は変らぬ。問題は中味だ」などの励ましの声を聞きながら社会に巣立って行った。いまそれが実現したので長い間の熱望が叶ったわけである。

校友会名の変更についても校友の間に賛否両論がでたが、校友会は学部と密接な関係にあるから当然改称すべきであるという結論に達して実施に踏み切ったのである。

◎ 第2回工学部校友会東京地区懇談会が開かれる

東京の第一ホテルを会場として、東京地方に在住する校友の第2回懇談会を開いた。この日は卒業式の前夜であったので、母校の先生方や来賓の方々多数出席していただき、校友も前回以上で150名の参加となり、お互に肩をたたき、乾杯しあい、再会を喜ぶ風景が満ちあふれ、頗る盛会であった。

- ◎ 日本大学工学部学生クラブ振興会が発足する。
日本大学郡山学園20周年記念行事の際、多数の校友の方々が訪ねて来ましたが、その時クラブ振興の対策についての話し合いがあり、何等かの形で学生のクラブ活動が活発にできるような援助をしようということになり、郡山在住の校友が発起人となって誕生した。

校友会としても微力ではあるが、この会に援助をしていくことになった。

- ◎ 校友会臨時総会開催される。

学生クラブ振興会の発足、学部創立20周年記念の二つに対する援助と校友会会則改正の問題にて、会長の招集による臨時総会を郡山商工会館において開催された。援助に対する件は原案通り、会則については①幹事の名称を除く ②学生からの経年会費は徴収しない ③会計年度は4月から3月までとする。④専門委員会を設置することができる、などの点が改正され、昭和42年度から実施することに決議される。

- ◎ 下宿対策委員会設置される。

名称…日本大学工学部下宿対策委員会
機構…工学部・校友会・学生この三者で組織
活動…下宿斡旋・調査・対策その他

- ◎ 第8回 定例総会を郡山商工会館にて開催
(会長根本年雄氏 機械4回卒)

昭和42年

- ◎ 工業化学科卒業生の京浜地区懇談会が開催される。

工業化学科の校友は500名を越えることになり、先輩の発案にて京浜地区方面の日本大学工学部工業化学科校友の京浜地区懇談会が文京区の湯島会館にて開かれた。会には恩師多数の出席もあり校友の数も80名を越え、先輩が後輩を励めます姿があちらこちらにみられ盛会であった。

- ◎ 工学部長に広川教授が就任

今までは理工学部と工学部の学部長が兼任であ

ったが今年から工学部長として長年学部で教鞭をとられていた、広川先生が初代の工学部長に就任され、今後の工学部の発展に尽力されることになった。

- ◎ 第10回総会 郡山商工会館で開催
(会長 根本年雄氏機械4回卒)

昭和43年

- ◎ 校友会館内の事務所の拡張工事をする。

校友会も創立以来10周年になった。それにつれて資料も多くなり、事務所内もせまくなったために拡張工事が行なわれ、小会議も出来る位の大きさになり名実共に校友会は扇の要の役目を果たすことができるようになった。

- ◎ 学園紛争の解決に校友会も尽力。

母校日本大学は建学以来平和な学園であったが諸般の状況から6月初めに紛争が起り工学部も不幸にして9月にバリケード封鎖された。翌年の2月に封鎖は解除になった。校友会としても一日も早く紛争が解決し平和な学園になるように微力ながら努力をする。

- ◎ 工学部長に野引教授就任

日本大学工学部の紛争の最中に不幸にして学部が火災が発生し、その責任から広川学部長が辞任しその後任として野引教授が就任され、今後の日本大学工学部の発展に寄与されることになった。

- ◎ 第11回総会 郡山駅前明石会館にて開催
(会長根本年雄氏 機械4回卒)

以上日本大学工学部校友会の発足10年のあゆみとして思うまま書いてみました、今日の校友会は他の校友会に優るとも劣らぬ基盤をもち健全な運営がなされている。しかし、ここまで来るには歴代の会長諸先輩の努力があったからこそ出事上ったのであり、今後も校友が手を取り合って発展に努力し有意義なものに育てあげねばならぬと考える次第です。今後ともよろしくお願い致します。

(校友会理事平手仁記す化学5回卒郡山工業高校勤務)

神奈川県川崎市小杉町1-513(南武線・東横線武蔵小杉駅下車3分)

企画から・カラー印刷まで

- カタログ
- チラシ
- ポスター

専門

当社作品をご覧ください

武蔵小杉日本医大横

印刷は二面

☎ 中原(044)73-3656・72-5128

代表取締役 小池武志(機械6回卒)

昭和44年度

校友会總會報告

昭和44年度（第12回）日本大学工学部校友会定例総会は、4月20日（日）午後1時から郡山市駅前の鈴伊において、開催された。

総会は会員多数及び昭和43年度全役員の出席のもとで開かれた。会は半沢前年度副会長の開会に始まり、根本前年度会長の挨拶があり、議長には満場一致で関根昭一前年度理事（電気2回）が選出されて議事に入った。

議事審議内容は次の通りである。

第1号議案 昭和43年度 会務報告

（前年度小林事務局長）

- ・昭和43年度定例総会が多数の校友参加のもとに駅前明石会館にて開催した。（43・4・14）
- ・昭和43年度日本大学工学部入学式に会長他多数の役員が出席する。（43・4・16）
- ・校友会報第13号を発行し、校友に発送する。（44・8）
- ・校友会事務所を学生による校舎封鎖のため、郡山市内に移転し、仮事務所を設置する。（43・10・25）
- ・日大紛争の経過報告と今後の校友会の基本方針を決定するため、臨時総会を郡山商工会館にて校友多数の出席のもとで開催する。（44・2・2）
- ・寮生の下宿料旋を開始する。（44・2）
- ・仮事務所から校友会館に復帰する。（44・2・24）

- ・校友会発足10周年記念事業として、校友会館内の事務室の拡張と便所の改善工事を行う。（44・2・3）
- ・日本大学工学部第17回卒業式に前会長他役員多数が出席する。（44・3・25）

第2号議案 昭和43年度会計報告並びに監査報告

- ・前年度小林事務局長から、決算報告書により款項目毎に説明報告があった。
- ・前年度小山田会計監査より、昭和43年度会計報告に異常なきむね報告があった。

第3号議案 昭和44年度 事業計画並びに予算審議

- ・前年度根本会長・小林事務局長より提案説明が行われ、審議の結果、原案通り議決された。

第4号議案 昭和44年度 役員選出

- ・選考委員会によって協議した結果武田氏が会長に選出され、その他の役員も別表のとおり選出され

新陣容がととのった。

以上審議が終り閉会した。その後懇親会にうつり、学部より来賓として野引学部長・本間電気科教授の臨席があり、和やかな雰囲気の中に楽しく歓談し、4時半散会となる。

昭和44年度校友会役員

役名	氏名	卒業	勤務先
会長	武田 仁幸	土木3回	東和工業KK
副会長	半沢 忠	化学6回	パラマウント工業KK
副会長	鈴木 光保	土木5回	大木戸建設KK
事務局長	齊藤久志郎	建築5回	郡山工業高校
理事	武藤 貞泰	土木8回	郡山市役所
理事	関根 昭一	電気2回	郡山西工業高校
同	根本 年雄	機械4回	国鉄郡山工場
同	釣巻 且男	電気3回	パラマウント工業KK
同	平手 仁	化学5回	郡山工業高校
同	佐藤 光正	機械9回	日本大学工学部
監査	諏佐 達也	建築1回	白河建築事務所
同	高野 操	化学3回	日本大学工学部
同	太田雄八郎	土木3回	郡山市役所
評議員	松山 光克	土木3回	郡山市水道局
同	小山田克己	土木5回	大木戸建設KK
同	吉野 一	土木17回	戸田建設KK
同	小栗 治男	建築7回	日本大学工学部
同	富田 和夫	建築11回	郡山建設事務所
同	馬場 彦吉	建築15回	郡山工業高校
同	塚原 健二	機械3回	旅館営業
同	水田 守	機械4回	郡山工業高校
同	齊藤 清夫	機械13回	郡山西工業高校
同	山岸 利正	電気4回	日本大学東北工業高校
同	高久田 稔	電気9回	郡山西工業高校
同	伊藤 宣世	電気14回	A電気
同	篠崎 道夫	化学2回	パラマウント工業KK
同	田部 栄仁	化学7回	中川ヒューマン管郡山工場
同	小川 敏彦	化学14回	日本大学工学部

事務局長小林剛が6月10付で辞任したので代行として副会長の半沢忠が兼務することになった。

「校友の消息」——校友諸兄弟の「お便り」「写真」など大歓迎いたします——

桃原 隆 第6回建築学科卒業

- ・琉球政府建設局土建部調査官
- ・校友会会長はじめ会員の皆様には、益々健康で御活躍、誠にご苦労のことと思います。

私達は母校の問題について、遠く離れている関係上、いささかその状況がつかめないで不安を感じています。

どうぞ我々母校がいつまでも、日本の新しい文化の園を築く後輩を育てる学園であるように、校友会の皆様のお助言、援助をお願いいたします。

朝倉治郎 第14回建築学科卒業

- ・相和技術研究所

- ・昨年より学園での出来事を、ラジオ、テレビ又新聞等で知り心配しております。来年70年には、再び学園が破壊されないよう念願しております。

青木孝松 第4回土木工学科卒業

- ・建設省東北地方建設局北上川下流工事事務所調査課長
- ・学園紛争もどうやら平常に戻りつつある様子で大変喜ばしい限りです。

江指皓司 機械工学科第12回卒業

- ・北海道小松車輛KK
小松車輛KKは北海道ディゼル機械KKと小松製作所（ブルドーザー）とが提携してできた会社で、北海道開発を目指していますが、私はここで活動しています。
- ・北海道ディゼルに勤務していた下記2名の先輩に

ついても紹介します。両先輩は同社の開発製品でありましたトレンチャーをもってトレンチャー技研KKを設立し4年目を迎えました。

内容は土地改良事業が目的です。ぜひ後輩を迎えたいと張りきっています。

トレンチャー技研KK

専務取締役 黒羽弘司 機械工学科第9回卒業
工事部長 沢 英一 同上

藤井静雄 第6回建築学科卒業

- ・舘莫建築事務所
- ・昭和43年6月15日建築6回生の同窓会（あかしや会第2回）を東京浅草の正華というところで開きましたところ恩師の細谷先生はじめ遠く下関より山田君も出席され、楽しいひとときを過ごしました。その時撮影した写真です。



——校友会事務局からのお願い——

1. お詫び

会員の総合名簿作成を、今年度を実施するよう去年7月発行した会報13号で予告しましたが、いろいろの事情によって、来年度に延期されました。なにとぞ御諒承ねがいます。

2. おねがい

◎現住所、勤務先の異動や変更、または改姓などありましたならば、その都度なるべく早く報告下さい。

◎終身会費の未納の方は、是非納入して下さいようねがいます。

◎会報の内容を充実し、皆様に親しみ愛していただくために、よりよい会報をつくってお手許に送りたいと念願しています。どうぞ諸兄弟の御意見、研究資料、随筆、短歌など、なんなりとお寄せ下さい。校友の会合の記録、写真なども大歓迎します。

◎自営の方で広告掲載を希望なさるときはご連絡下さい。

3. 卒業証書、卒業証明書のことについては学部の庶務課（電話郡山②3230）に連絡されるようお願いいたします。

学 園 だ よ り

1. 第17回の卒業について

◎昭和43年度卒度の卒業式は、3月23日と4月6日の2回に亘り、母校において行われた。

◎野引学部長の告辞の要旨「実社会に立って人間としての認識を深めること。学園紛争のなかでの苦難とその体験を生かした『勇気ある行動』を実社会へのはたらきかけとすること」を強調された。

◎各科別の卒業生は下記の通りである。

土木工学科……148名 建築学科……243名
機械工学科……168名 電気工学科……116名
工業化学科……49名 合計……724名

2. 入学生

昭和44年度入学式は4月29日母校大講堂において行われ、生気と気概にみちた1160名の新入生が晴れて工学部の学生となった。

3. 新学期開始

紛争の影響などで例年より10日ほど遅れた新学期は5月1日をもってスタートし、新入生はオリエンテーションも終って5月6日より正規の授業に入った。また2年以上は学年末試験が5月10日までに無事終了し、しばらく休みに入ったが21日から新学期に入った何れも落ち着いた態度で勉強に励んでいる。

暑中休暇は1年が7月11日より、2年以上は7月21日より実施することになっている。

4. 学園の建築計画について

新学期とともに、新しい教育環境づくりも行われており、本館の改造工事、道路の建設、実験設備関係も着々と進められている。

◎管理棟は修理改造の工事がこの程完成したので図

書館及び111教室を使用していた事務関係は7月3日移転した。

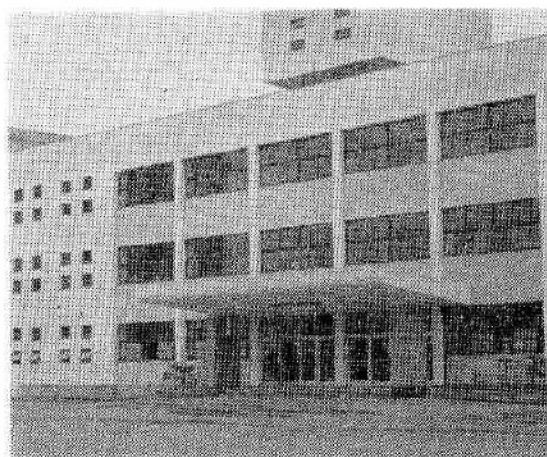
こんど改造した管理棟の一階は中央階段を挟んで西側の部屋に会計、教務・学生の三課と就職事務関係が入り、東側の旧衛生室などを改造した部屋には庶務課が入った。そして事務関係が機能的に処理できるよう便宜をはかったことが注目される点である。

◎図書館の復旧工事は一部の破損工事と、内部改造で、とくに図書の貸出しと図覧室など利用しやすいように実施する計画である。

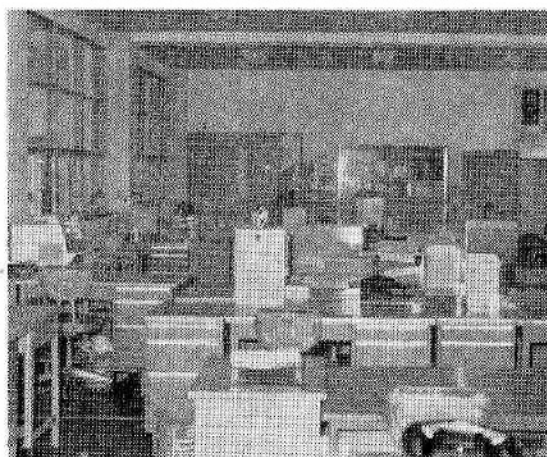
5. 本年度工学部の人事により、下記16名の校友が昇格並びに採用の発令があった。後輩の指導、教育のために努力しておられます。

◎助教授	松 塚	勇	(電気1回卒)
全	鳥 羽	重 幸	(電気1回卒)
全	安 田	禎 輔	(土木6回卒)
全	浪 越	勇	(土木5回卒)
◎専任講師	小 林	秀 一	(土木7回卒)
全	小 栗	治 男	(建築7回卒)
全	黒 田	浩 司	(建築7回卒)
全	矢 戸	敏 雄	(電気6回卒)
全	国 分	欽 智	(電気1回卒)
◎助 手	原	忠 勝	(土木15回卒)
◎副 手	今 村	仙 治	(機械17回卒)
全	今 里	和 正	(機械17回卒)
全	岡	憲 治	(機械17回卒)
全	渡 辺	直 隆	(電気17回卒)
全	内 山	一 男	(電気17回卒)
全	高 橋	賢 治	(電気17回卒)

復旧した管理棟正面



改修整備された管理棟一階の内部



NEWS

海外見学者募集

工学部建築学科

日大工学部建築科

第1回海外建築研修見学実習について

日本大学工学部建築学科教室

建築学科(全日大)の海外旅行見学を工学部建築学科で実施してもらいたい希望が相当ありますので、下記の通り計画し欧州7カ国の著名な建物の構造デザインや遺跡、新都市計画を中心に研修見学いたしたく希望調査を行います。実習が行われる場合、参加出来るOBは優先いたしますので返答して下さい。

記

- 1、名 称 第1回日本大学工学部建築海外研修会
- 2、参加人員 80名(4年生・OB優先) 引卒者、建築科教員及び医師 村田 孝司
- 3、実施期間 昭和44年12月20日より昭和45年1月

11日まで(22日間)

4、訪問先国 欧州7カ国

5、総費用 ￥417,000-《含まれるもの》 航空運賃、ホテル宿泊費(2人室)、食事費用(1日3食)、交通費(バス、鉄道運賃、船賃等)、視察料金、入場料金、ガイド料、団体行動中のチップ、税金くただし、旅券代、予防注射代、超過手荷物料金(20kg以上)、洗濯プレス代、電話代、飲酒代等個人的用途の費用は含まれてありません>

なお、総費用は人数の増減による変更はありません。

6、日 程

日数	場 所	摘 要
1	東 京	
2	(アムステルダム経由) ローマ	有名建築物視察
3	ローマ	都市計画状況視察
4	ローマ	市内視察
5	ローマ、フローレンス	ヴィザンチン芸術様式の建物等の視察
6	フローレンス、ヴェニス	有名建築物視察
7	ヴェニス、ミラノ	市内視察
8	ミラノ、ジュネーブ	国際機関関係建築物
9	ジュネーブ	市内視察
10	ジュネーブ、デイジョン	市内視察
11	デイジョン、パリ	市内視察
12	パリ	ノートルダム寺院、エリーゼ宮、ソルボンヌ大学
13	パリ	
14	パリ、ブラッセル	有名現在建築物視察
15	ブラッセル、ジュッセルドルフ	都市計画状況視察
16	ジュッセルドルフ	DEBAVドイツ建築展、国際建築会議参加
17	ジュッセルドルフ、アムステルダム	新都市計画状況視察
18	ロンドン	セントポール寺院、大英博物館、イングランド銀行
19	ロンドン、アムステルダム	ロンドン郊外の新都市計画(ハロー状況等)
20	アムステルダム	埋立地における建築状況視察
21	東 京	

- 7、参加希望申込 (昭和44年9月1日までに、日大工学部建築科教室師橋研究室にハガキに署名捺印の上提出して下さい)

8、申込様式

第1回日大工学部建築海外研修会に参加します。

卒 業 科第 回(昭和 年度)卒業

氏 名 ㊦

現住所 TEL

局 番